

前衛的かつロマンティックな唯一無二の作風

アルバン・ベルク

Alban Berg (1885–1935)

シェーンベルク、ウェーベルンとともに「新ウィーン楽派」として前衛的な作曲法を推し進めたベルクだが、3人の中ではもっともロマンティックな作風で知られる。ヴァイオリン協奏曲の依頼を受けた彼は、マラーの妻アルマ

が夫の死後、建築家グロピウスと再婚してもうけた娘マノンの急逝を悲しみながら、この協奏曲を完成させた。「ある天使の思い出に」という献辞には、マノンだけでなく、かつて別れたわが娘の思い出がこめられているという。

B
2025
MAY
[第2037回]
👁️👁️

はかなく世を去ったマノンに
みずからの若き日を重ねて……
イラストレーション: ©IKE



「ある天使」とは誰か

ベルクは聡明で美しいマノンをことのほか可愛がったという。青年時代に使用人だった女性とのあいだに娘をもうけながら引き離された過去をもつベルクは、マノンの思い出に、若き日の愛の記憶を重ねたのだろう。そして彼もまた、『ヴァイオリン協奏曲』が完成したその年の暮れに世を去ってしまったのだ。